

吉見静子（岐阜女大）

目的 伝統的な民家での生活習慣が消えていく中で、実際に使用された事例を通して、空間構成の特性を明らかにすることを目的とし、儀式には古くからの空間認識が伝承されていると考え、古い形式を色濃く残していると考えられる結婚式を取り上げた。

方法 聞き取り調査と古文書の収集を試みた。聞き取りは昭和期を遡れず、古文書も明治2年がもっとも古いものであったが、この時代であれば、江戸期の習俗と同様であると考えられる。なお、今回は滋賀県北部の農家を対象とした。

まとめ 明治末期以前は新婦は勝手口から内向きの空間〈だいどこ〉・〈ねま〉を通過して表の空間〈ざしき〉にある仏壇を拜む。夫婦・親子の盃は〈ねま〉で行う。明治末期から昭和初期にかけて新婦は門口から入るようになる。このことは、結婚が労働力の確保や家の継続という側面をもった家の内向き行事であり、その場も〈ねま〉、あるいは〈なんど〉と呼ばれる収納の場でもあった内向きの空間で行なわれた。明治末期から昭和初期にかけては、農村経済の向上や民主主義思想の普及によって、結婚式が親戚や地域の人々と共に喜ぶ晴れの行事になり、表向きの空間〈ざしき〉で行なわれるようになった。但し、夫婦・親子の盃事は〈ねま〉で行なわれていることは、農耕を生活の中心とする農家における〈ねま〉重要性を示しており、住まいの根源を今に伝えているといえる。

農家の結婚の儀式は、〈ねま〉が家の中心であり、その場が家族の核である夫婦の生活の場であることを示しており、家を中心とし、田畑のある集落内を生活の場とする農家では、人との付き合いも家を核とした空間的な広がりの中で、営まれているといえよう。